



GREEN LETTER

グリーンレター

Vol. 261

2018/09/01

今月の一枚

今月のイベント

参加者募集

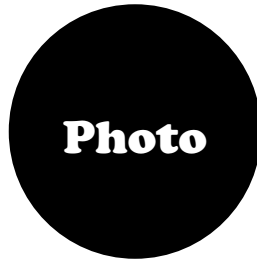
GREEN COLUMN

01. 歴史から消えた？幻の小学校

02. 絵の具のお話



今月の一枚



「網走湖を望む風景」

表紙写真・文／八重柏誠

美幌町の登栄地区は、標高 2 ～ 300m のなだらかな尾根状の台地に位置しており、台地上には畑が広がる、のどかな田園地帯となっています。晴れた日に、木々の間から見える景色は美しく、知る人ぞ知る眺望ポイントだと個人的には思っています。

そんな眺望ポイントから、網走湖方向を撮影した写真を紹介です。遠くは網走の呼人方面まで望むことができました。この場所から見る景色は美しく、また、見る方角を変えると、見慣れない角度から美幌の風景を見ることができる場所ともなっています。

Event. 今月のイベント

特別展「アイヌ文化に生きる植物」 ～10月21日（日）

美幌博物館でお宝を探せ！ 9月1日（土）～9月30日（日）

プチ工房「やってみよう！草木染め」 9月12日（水）, 15日（金）

無料開館 9月16日（日）, 17日（月）

Information. 参加者募集

美幌博物館でお宝を探せ！

● 9/1 (土) -9/30 (日) 9:30 - 17:00 受付で用紙を受け取り参加。ナゾがとけたら終了。 ●美幌博物館 展示室 ●展示室観覧料（高校生以下・町内在住 65 才以上は無料） ●久保田結衣（美幌博物館） ●申込み不要。

プチ工房 「やってみよう！草木染め」

● 9/12 (水) , 14 (金) 10:00-12:00, 14:00-16:00 自由に入室。作品ができたら終了。 ●美幌博物館 1F 講座室 ●材料費（1 個 400 円） ●城坂結実（美幌博物館） ●申込み不要。小学校 3 年生以下は保護者の同伴が必要。

今月の休館日

3 日, 10 日
18 日, 25 日

〈凡例〉 ●日時 ●場所 ●費用, 持ち物 ●講師 ●申込み方法

01 GREEN COLUMN グリーンコラム

歴史から消えた？ 幻の小学校

写真・文／八重柏誠



美幌町の学校の始まりは明治33年、美幌簡易教育所（のちの美幌尋常小学校）の開所までさかのぼります。明治38年になると、現在の美和地区にかつくみ活汲特別教育所（のちの活汲尋常小学校）が開所しました。この学校は、美幌尋常小学校への通学が困難な、子供達のために作られた学校と言えます。一方、網走川右岸（美富・豊幌地区）に住む子供達は、網走川を渡って活汲尋常小学校に通っていましたが、当時は橋などなく、危険な通学を余儀無くされました。それは大正2年、現在のサンマルコ食品津別工場のある辺りに、第二活汲尋常小学校ができるまで続けました。

2つの学校ができ、全てが解決したと思えたところで、大きな出来事が起きます。大正8年の津別分村です。分村により、村境にあった活汲尋常小学校と第二活汲尋常小学校に通う子供

達は、それぞれの村の学校に通う必要が出てきたのです。津別側にあった第二活汲尋常小学校は、後の活汲小中学校のある場所に移転、村境から少し離れて通学の利便性を高めました。一方、美幌側では、網走川右岸に住む子供達のことを考え、大正10年に豊幌地区に上美幌尋常小学校が開校しました。

更に昭和3年には、栄森地区の人口が増加したことから境特別教授場（のちの栄森小学校）が開場します。分村や新たな学校の開校により、活汲尋常小学校は次第に児童の数も減少し、昭和6年には、上美幌尋常小学校に併合されることになりました。

活汲尋常小学校は、美幌で2番目に古い学校にも関わらず、最初に統廃合で消えた学校とも言えます。その名称から、津別町の学校のような印象を受け、町史にも僅かわずかに記述されるだけの幻の小学校と言えるかもしれません。

絵の具の お話

写真・文／久保田結衣



お盆を過ぎると、涼しくなり、日々景色の変化を実感します。自然の雄大さを肌で感じる中で、ふと絵の具と自然との関わりを思い出しました。今回は、絵の具について少しお話をしたいと思います。

現在の絵の具の成分は、大まかに、色の素となる「顔料」と、顔料をまとめる「定着材」で作られています。顔料は、土や鉱物、動物の骨等細かく砕いた粒子や化学物質が使われ、定着材は、植物性の油、動物性のたんぱく質（にかわ）などが使用されています。

現存する最古の絵画は、約6万～2万年前に世界各地で描かれた洞窟壁画（諸説あり）とされています。壁画には、茶褐色や黄色が使われ、土や石を砕いたものから着色が行われたものと推測されており、その後に続く絵画でも使用されていました。これが顔料の祖とも言えるのですが、古代より土の色

の変化で絵を描いた先人の知恵と感性には大変驚かされます…。

その後は文明の発展とともに、絵画技法も時代ごとに変化します。色彩表現も広まる中で、青系の色は、アズライトやラピスラズリという鉱石を砕いたものを抽出するのが主流でした。しかし、原石が貴重であるため、合成の顔料が発明されるまでは、青は希少な色とされていました。今でも、油絵の具や日本画で使われる岩絵の具が、色によって価格が異なるのは、原料の価値が現れているとされています。

絵の具の成分・歴史について、考える機会はあまり無いかと思いますが、自然との関わりや、文明とともに変化してきたことに面白さを感じます。まさに天然の恩恵を受けた結晶であると言えるかもしれません。そう思うと、何気なく使っている絵の具も、色一つ一つに愛着がわいてくるのでした。

【発行】

美幌博物館

【デザイン・編集】

城坂結実・久保田結衣

【お問い合わせ先】

美幌博物館

北海道網走郡美幌町字みどり 253 - 4

Tel / 0152 (72) 2160 Fax / 0152 (72) 2162

mail / museum@town.bihoro.hokkaido.jp

<http://www.town.bihoro.hokkaido.jp/bunya/museum/>

無断掲載・転載を禁ずる

学芸員のつぶやき

.....



先日は足をのばし、根室や知床を旅しました。見るものすべてがダイナミックですっかり魅了されました！しかし、テンションに身を任せていたら、お土産屋で海藻類を大量に購入…。景色を思い出しながら、昆布たちをどう調理しようか考えています。(久保田)